

# HCU EAGLES NEWS

広島都市学園大学 女子バスケットボール部 R4.11 NO.9



## 2022年第8回スペシャルオリンピクス日本夏季ナショナルゲーム・広島ボランティアに参加

知的障害のある人たちが日本全国から集うスポーツの祭典が広島で開催された。バスケット部員も11月6日7日の2日間ボランティアとして参加した。バスケットボール競技が行われる広島グリーンアリーナと水泳競技が行われる呉市営プールに分かれての参加となった。アスリートに付き添い2日間を競技会場で共に過ごす「DAL」という役割であった。大会ボランティアの中でも最もアスリートの皆さんと近くで接する役割に、部員も最初は緊張している様子だったが、試合前のアップでボールをパスしたり、試合中にドリンクのお世話をしたり、応援したりするうちに、試合の合間に雑談をしたりする仲にまでなった者もいた。私自身も2日間観戦し、シュートを入れて喜ぶ選手やそれを応援する家族や関係者の人々の近くにいると、心が温くなる思いであった。



鹿児島県選手団の皆さんと

表彰式でも忘れられない場面に遭遇した。その直前に何があったのか分からないが、一人の選手が表彰台への登壇を拒んでいた。チームメイトはすでに表彰台に上がってメダルを受け取っていた。メダル授与者の有森裕子さんが、椅子に座ったままの選手の所まで行き、表彰台に上がろうと声をかけたのである。頑なに拒む選手と静まりかえった会場に時間だけが過ぎようとしたそのとき、有森さんは表彰台にすでに上がっている選手達を呼び、一緒に上がるように誘ってと声をかけたのである。2、3名の選手が表彰台から降り、彼の元へ近づき一緒に上がろうと誘った。それまで拒み続けていた彼は一変し、誘ってくれた仲間に抱きつき喜びを表現した。そのまま仲間に抱きかかえられて表彰台に登壇し、メダルを有森さんからかけてもらったのである。会場に盛大な拍手が湧き起こり、先ほどまで登壇を拒んでいた彼も嬉しくもあり、照れくさそうでもありといった表情で記念写真に収まっていた。表彰台でメダルを授与し讃えてあげたいという有森さんの思いと、彼を思いやる仲間の思いが会場全体を感動の渦に巻き込んだ場面であった。



呉市の水泳会場にて



後半開始前のベンチにて

## ～部員の感想 ボランティアを終えて～

私がボランティアで担当したのは熊本のチームでした。熊本のチームはコーチたちと選手たちの仲が良く、常にお話しをしていました。また試合になるとコーチは、挨拶や身だしなみに厳しく、コートの中で走って戻ることをしなかったら走りなさい！と注意をしたり、自分勝手なプレーをしていたら、その人に出しやすいパスをしろ、自分のやりたいようにやるのはキャプテンではないなどと厳しい声掛けではっぱをかけていました。チームスポーツにとって大切なことを選手に伝わるように、分かりやすく具体的に声かけをしていました。

試合の時と普段とを切り替えることでコーチと選手の間に信頼関係が生まれるんだなと思いました。私も教師になった際には怒らないといけない時は厳しく言えるよう、切り替えながら子どもと接していきたいと思いました。

今回の知的障がいの方々と関わって、みんな心優しくて、面白くて、沢山話す方もいてとっても楽しく、本当に貴重な体験をすることができました。(2年 関口奈優)

今回のボランティアで私は普段出来ないことを体験した。初めは障がい者のスポーツといっても想像が出来なかった。この二日間を通じて、私たちが普段やっているバスケットと変わらないと思ったのが正直な感想だ。しかし、試合に入る前の一人ひとりに対する周囲の配慮がすごいと感じた。試合に集中するために試合の間(2日間)は親と会わせないのだそう。気が散ってしまうと切り替えるのが難しいからなのかなと私なりに考えた。付添の先生がボランティアの私達にも一人ひとりの選手の性格や特徴をその都度細かく伝えてくださったお陰で、選手に対してすごく接しやすく感じ、沢山話をする事が出来た。試合前のアップでゲームをしたり、試合中もハイタッチをしたりしてとても楽しい時間を過ごすことが出来た。選手同士で出来ないことを互いにカバーし合ったり、「大丈夫だよ！」「出来たよ」「出来るよ」「もう少しこうしたらいいよ」等の声かけをして、沢山コミュニケーションが取れており、試合中みんなが楽しそうだった。(2年 鶴池七海)



熊本県選手団の皆さんと



試合中のタイムアウト



試合前のアップでパス出し



奈良県チームのベンチにて